大学生に求められる力をどのように考えるか：
学生による自由記述の結果による報告

伊　藤　美　加

キーワード：大学生、思考力、自由記述

要　旨：

本稿では、大学生に求められる力、特に思考力について、大学生と大学生以外ではどのように考えるのか、そしてそれらはどのように異なるのかという視点から検討した。具体的には、大学生に求められる力について、自分の考えを記述し、他者にインタビューを行うことで他者の考えをまとめてもらうという形式で、データを収集し、その結果を分析した。その結果大学生に求められる力として、大学生も社会人も「考え抜く力」を、社会人は大学生よりも「チームで働く力」を重視していた。そして「考え抜く力」の分析から、大学生はレポート作成や課題提出に必要な力を大学生に求められる力としているのに対し、社会人は問題発見解決に至る一連のプロセスに必要な力を大学生に求められる力としていると解釈された。

Ⅰ　はじめに

多様性のある学生たちを速やかに大学教育へ移行させることを目的とした導入教育の取り組みとして、2001 年度より、京都光華女子大学・短期大学部の新入生を対象に、「大学基礎講座Ⅰ」および「大学基礎講座Ⅱ」を開講してきた。これらの授業の目標は、学生が、人の話を聴いて要点を把握したり、特定のテーマに関する情報を収集したり、自分の考えていることを正確に文章に表現する、あるいは相手にわかりやすく伝えるという、基礎的な学習技能を身に付けることができるようになることであった。更に、授業への取り組み方を改め、学習意欲を高めることで、大学で学ぶ意味を学生それぞれがより深く考える機会を持つことも目指していた。つまり、大学で必要な学習技能の習得と望ましい学習態度の育成を通して、大学生の「学ぶ力」を向上させようとしてきた（藤田, 2002a, 2002b; 伊藤, 2004, 2005, 2007）。

そして 2010 年度の改組に伴うカリキュラム改変により、「大学基礎講座Ⅰ・Ⅱ」の学習内容は各学科の専門教育「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」に含めることとなり、代わって、大学だけでなく社会へ出てからより重要となる「社会人基礎力」（経済産業省 , 2006）を身につけさせるための授業科目として、「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」が新設された。この授業では、グループ討論の仕方、発表の準備の進め方、資料の検索方法、レジュメやスライドの作り方、そして発表の仕方について、他者と協調しながら学習に取り組むグループ学習を導入していた。こうした学習技能の習得をグループによる学習を通じて行うのは、学習は他者とのやり取りの中で構築され磨き上げられるという学習科学の考えに基づき（三宅・白水 , 2003）、他者と協同して学ぶことでコミュニケーション・スキルを向上させるためであった（伊藤, 2012, 2013）。

しかしながらこれらの取組の中で、学生の思考力の欠如が気にかかるようになった（伊藤, 2006）。大学では、自分できちんと考えることに価値を置いている。「考えろ」と実際にことばであらわされているかどうかにかかわらず、多くの場面で「考える」ことが求められている。しかし学生は、きちんと考える必要性を理解しないまま、特定の技能・スキルが身につけばそれでいい・十分だと誤解しているよう、教員には懸念される。そもそも「大学生に必要な力」や「考える力」は、教員が感じている重要性と、学生の感じている重要性との間にギャップが存在しないだろうか。それらの定義そのものも違うかもしれないとの考えに至った。

そこで本稿では、大学生に求められる力、特に思考力について調べることを目指し、まずは学生の認識を知るために行った調査結果を分析・報告する。大学生が考える大学生に求められる力と、大学生以外が考え

るそれとは異なるであろう。さらには個人でも異なる。自分が考えるそれと自分以外の他者が考えるそれとの差異を認識することによってどのように考えるかについても示唆を与えうるであろう。大学生に求められる力、特に思考力を実証的に明らかにすることは、大学教育のあり方を検討する上で貴重な資料となり得ると考えられる。

Ⅱ　方法

調査概要

大学生対象に、大学生に求められる力、思考力とは何かについて、自由記述による調査を行った。

調査は、筆者の担当授業「心理学」の 2021 年度の受講生を対象に実施した。この科目は全学対象のリベラルアーツ教育科目の選択科目で、例年様々な学科の 1 年生が多く受講するため、多様な価値観を反映した意見が期待される。大学生に求められる力、思考力について、受講生に自分の意見と他者の意見とを述べレポートとしてまとめるように求めた。他者の意見はインタビューにより収集することとした。インタビューしてまとめた「他者」の意見を分析対象とする上で、それが「他者」の意見を正確に反映しているのかといった正確性や妥当性の問題があるとしても、学生の視点による「他者」の意見を調査対象にすることで、受講生が認識した自分とは異なる「他者」意見として分析できるという利点があると考えたため、この調査方法を選択した。

「心理学」の「第 13 講 心理臨床の実践」では、カウンセリングにおける積極技法（例：うながし技法、繰り返し技法）を紹介し、話をよく聴く上で重要な要素を説明した。そして受講生はそれを理解した上で、他者にインタビューを行い、実際に技法を実践することが授業目標であった。この授業内容を踏まえた課題として、大学生に求められる力、思考力について、まず自分の意見を述べ、次に他者の意見をインタビューを通して聴き取り、自分の考えと他者の考えを比較することとした。具体的には「大学生に求められる力、思考力とはどんなことだと思いますか。技法を使って、他者にインタビューをしてみよう。自分の考えと他者の考えを比較して、感じたことや気付いたことをまとめてください」と示した。

手続き

受講生に示した手順は以下の通りであった。

インタビュー実施の際は、調査協力の依頼の後に、プライバシーへの配慮や調査に参加しない自由の確保についても説明し確認を行うことを例示した。

①自分の考えをまとめましょう。
②他者の考えを聴くために、インタビューをしましょう。まず誰にインタビューをするか決めましょう。できれば自分と異なる立場の人が望ましいです。インタビューをしたい人が決まったら、協力の依頼をしましょう。時間をとってもらえるようお願いしましょう。対面が難しければ、LINE や Zoom、メール等活用しましょう。
例：大学の授業で「大学での学び方についてインタビューをした結果をまとめるというレポート課題がでたので、協力してもらえませんか」。
③次に実際にインタビューをしましょう。いきなり質問攻めにしないよう注意しましょう。意識して技法を使ってみてください。メモしながら聴く、あるいは承諾を得て録画・録音することをお勧めします。
例：大学生のころは、どんなことしてましたか？
……軽い質問から
今の大学生についてどう思いますか？
大学生に必要な力とは、どんなことだと思いますか？
大学生に求められる力、思考力とは具体的にどのようなことだと思いますか？
大学生へアドバイスしたいことはありますか？
大学生にもどれるとしたら、どんなことをしたいですか？
④インタビューが終わったら、きちんとお礼の言葉を述べましょう。
例：ご協力どうもありがとうございました。お話を聴いたことをまとめて、レポート課題として提出します。個人のデータとして公開されることは決してありません。
⑤インタビューの結果をまとめましょう。
⑥自分の考えと他者の考えを比較しましょう。
⑦技法を使っての感想を述べましょう。
⑧提出期限に間に合うように提出をしましょう。

Ⅲ　コーディングによる分析

受講生 254 名の内 212 名が協力した。高大連携事業の一環で受講者に高校生が含まれていたため除外し、204 名の回答を分析対象とした。

大学生に求められる力、思考力について、「自分の考え」（以下「自分」）として記述したものをサンプリングした。「他者の考え」（以下「他者」）として記述したものには、誰にインタビューをしたのかも併せてサンプリングした。いずれの場合も、記述内容が複数にわたる場合は、それぞれ別の記述として扱った。その結果、「自分の考え」は 272 記述、「他者の考え」は 334 記述となった。

他者としてインタビューをした相手は、不明を除くと親が最も多く（75 名：315 名中 23.8％にあたる）、次に友人（61 名：19.4％）、先輩（34 名：10.8％）が続いた。残りの内訳は、兄弟姉妹（27 名：8.6％）、親戚（18 名:5.7％）、知人（10 名:3.2％）。インタビュー対象者について記述がないものを不明とし 90 名であった。「自分の考え」と比較する目的のため、できるだけ自分と立場が異なる人をインタビューの相手とすることが望ましいとは伝え、対面で実施しなくとも構わないことも伝えていたものの、心理臨床の技法を試してみる上で相談や話をしやすい相手や物理的に近い相手を選んだと考えられる。中には、複数の相手にインタビューを実施し、他者間比較を行った受講生もいた。また少数ではあったが、祖母やバイト先の店長、高校の恩師にインタビューをした例があった。他者として誰にインタビューをしたかによって、「他者」を「社会人」「同年代」「不明」に区分した。「社会人」には両親や親戚、先輩が含まれ、「同年代」には友人が含まれる。

Table 1：大学生に求められる力、思考力についての自由記述：自分の考え（自分）と他者の考え（他者、社会人）別の、記述数と全体に占める割合

カテゴリー名	ラベル名	自由記述例	数			割合		
			自分	他者	社会人	自分	他者	社会人
前に踏み出す力			54	66	39	19.9	19.8	22.8
	主体性	自分で率先して取り組むこと，主体性を持って自ら物事を取り組む	23	42	27	8.5	12.6	15.8
	実践力	社会で必要になる力を身に着けること	13	10	7	4.8	3.0	4.1
	実行力	判断したことを行動に表すこと	8	11	3	2.9	3.3	1.8
	働きかけ力	自分から働きかけようとすること	3	1	0	1.1	0.3	0.0
	自己理解	自分について知ること	2	1	1	0.7	0.3	0.6
	自己決定力	進むべき方向を自分の頭で考え、自分で決める力	5	1	1	1.8	0.3	0.6
考え抜く力			160	177	82	58.8	53.0	48.0
	自分で考える力	自分自身で考え結論を出せる力，自ら疑問を持ちなぜそう思うのか考える力	39	46	13	14.3	13.8	7.6
	対比的思考力	人と自分の考えを比べて受け止めること	4	4	1	1.5	1.2	0.6
	多角的思考力	多角的な観点から物事を考える力	17	16	8	6.3	4.8	4.7
	批判的思考力	情報に頼りすぎず鵜呑みにせずに少し時間をとって自分で考える	11	6	4	4.0	1.8	2.3
	論理的思考力	論理的に順序立てて考えること	9	15	8	3.3	4.5	4.7
	情報分析力	レポートなどで情報を正しく見極めて整理する力，情報を収集し分析する力	12	12	7	4.4	3.6	4.1
	計画力	先を見越して期限などに間に合うように予定を立てること	7	3	2	2.6	0.9	1.2
	創造力	型にはまらない創造力	6	8	6	2.2	2.4	3.5
	発想力	学生ならではの斬新な発想力	6	3	2	2.2	0.9	1.2
	想像力	その場だけでなくその先のことまで考える力	11	19	7	4.0	5.7	4.1
	判断力	臨機応変に対応できる判断力	6	15	7	2.2	4.5	4.1
	課題発見力	自分で物事の問題点を見つけ出しその問題点について深めていくこと	10	8	6	3.7	2.4	3.5
	問題解決力	あらゆる場面で問題に直面した際の解決方法を考えること	22	22	11	8.1	6.6	6.4
伝える力			11	18	9	4.0	5.4	5.3
	説得力	自分が言いたいことを考えそれをうまくまとめながら相手に伝えること	3	4	1	1.1	1.2	0.6
	プレゼンテーション	自分の考えを明確に伝える力	3	3	1	1.1	0.9	0.6
	発信力	内容を理解したうえで自分の考えを持ち他者に発信する力	5	11	7	1.8	3.3	4.1
チームで働く力			44	73	41	16.2	21.9	24.0
	柔軟性	場面に応じて柔軟性があり的確に対応すること	6	8	4	2.2	2.4	2.3
	協調性	チームワーク，協力しながらチームの中で役割や責任を果たす力	4	7	5	1.5	2.1	2.9
	規律性	社会に出るための礼儀と責任感や常識をわきまえておくこと	8	9	6	2.9	2.7	3.5
	コミュニケーション	他者と上手くコミュニケーションをとることができる力	5	13	8	1.8	3.9	4.7
	傾聴力	お互いの話をしっかり聞ける話せるようにする能力	6	0	0	2.2	0.0	0.0
	状況把握力	自分と周りの状況を確認しどのようにすればうまく連携を取れるか考えること	5	15	7	1.8	4.5	4.1
	思いやり	相手を慮れること，周りへの気配りが出来るような思考	9	14	8	3.3	4.2	4.7
	経験	学生の間にしかできないことをたくさん経験しておく	1	7	3	0.4	2.1	1.8
その他		精神的に大人になる，自信	3	0	0	1.1	0.0	0.0

ラベル・コーディングとカテゴリー分類の方法

西道（2011）の社会人基礎力に関する尺度名を参考に、各記述にラベルを命名しコーディングを行った。その際、ラベルの数は、十分にラベル間の差異がありつつ煩雑となりすぎないよう注意した。コーディングに迷ったものは、研究協力者と協議して決定した。

更に各ラベルを、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「伝える力」「チームで働く力」の４つのカテゴリーのいずれかに分類した。

以上のようにコーディングした結果を、カテゴリーおよびラベル別に自由記述例と共に示したものがTable 1である。自分の考え（「自分」）と他者の考え（「他者」と「社会人」）別に、各ラベルの記述数と、全体に占める割合として百分率で表したものとを示す。なお「社会人」は「他者」の下位分類である。

カテゴリー別の「大学生に求められる力」

「前に踏み出す力」では、「自分」と「他者」「社会人」ともに、高校までとは異なることを指摘する記述（例：高校までのようなただ教えられたことを覚えるだけではなく、自分でそのことについて関心を持ち、授業で習ったこと以上に積極的に調べたりして、深く考察すること）や社会に出るにあたって役立つことを期待するような記述（例：社会へ出た自分を想像し、今の自分に足りない部分を見つけて社会で必要になる力を身に着けること）が多く、「主体性」「実践力」「実行力」の割合が高かった。

「考え抜く力」では、「自分」と「他者」ともに、「自分で考える力」の割合が高かった。自分で考えたことを、他者が考えたことと比べる「対比的思考力」、別の視点から考える「多角的思考力」、鵜呑みにせずに考える「批判的思考力」、順序だてて考える「論理的思考力」も「自分で考える力」の具体例とみなすと、より割合が高いといえ、自分できちんと考えることを重視していると考えられる。「情報分析力」の割合も比較的高く、メディアやインターネット、他者の意見を含め、さまざまな情報を踏まえた上でそれらに流されずに、自分は何をすべきなのかを考えて行動できることを挙げる記述が多かった（例：調べた情報をそのまま信じるのではなく、懐疑心をもって情報と向き合う力）。また、「課題発見力」と「問題解決力」は、特定の疑問を見出しそれを適切な方法で解決するというように連続した力とみなすと、大学で学ぶために必要な力としてこれらの力の割合が高いと考えられる。「情報分析力」「課題発見力」「問題解決力」は、ひいては「自分で考える力」に繋がるともいえよう（例：答えがある問題に対してただ先生や教科書に頼りながら答えを導き出すのではなく、答えがまだ曖昧な問題に対しても、学びによって身につけた知識を活かしながら自分の答えを導き出すこと）。

「伝える力」では、「説得力」「プレゼンテーション力」「発信力」のいずれも同程度の割合で、自分できちんと考えることの次にそれを効果的に伝えることや表現することを想定しているのではないかと考えられる。

「チームで働く力」では、グループで特定の成果を出すことが求められていることを指摘する記述があり（例：他者と共通点や違いを理解し合い、気づきを得たりすることなどチーム、グループで問題を解決できる力）、「協調性」や「状況把握力」の割合が高かった。同時に、周囲に気を配る等チームワークにつながるような記述があり（例：自分中心ではなく人の立場に立って物事を捉えて、相手の思いをくんで行動すること）、「思いやり」の割合も高かった。

自分と他者、社会人の「大学生に求められる力」の比較

大学生に求められる力、思考力について、「自分」と「他者」、「社会人」における、カテゴリー別の割合をFigure 1に示す。なお「社会人」は「他者」の下位分類である。

本調査では、大学生に求められる力として思考力を重視するような質問（インタビュー）とみなせるためか、「自分」でも「他者」や「社会人」でも、４つのカテゴリーの内、「考え抜く力」の割合が最も高く、「伝える力」の割合が最も少なかった。

「自分」「他者」「社会人」におけるカテゴリー別の割合をみると、「自分」と「他者」とでおおよそ類似していた。実際にカイ二乗検定を行った結果、有意な差は得られなかった（$\chi^2(3)=3.97, n.s.$）。一方、「自分」と「社会人」ではカイ二乗検定を行った結果、有意傾向が認められ（$\chi^2(3)=6.35, p<.10$）、残差分析を行ったところ、「考え抜く力」と「チームで働く力」で差が認められた（いずれも$p<.05$）。よって、「社会人」は「自分」よりも「チームで働く力」を大学生に求められる力と記述する割合が高いことを示す。す

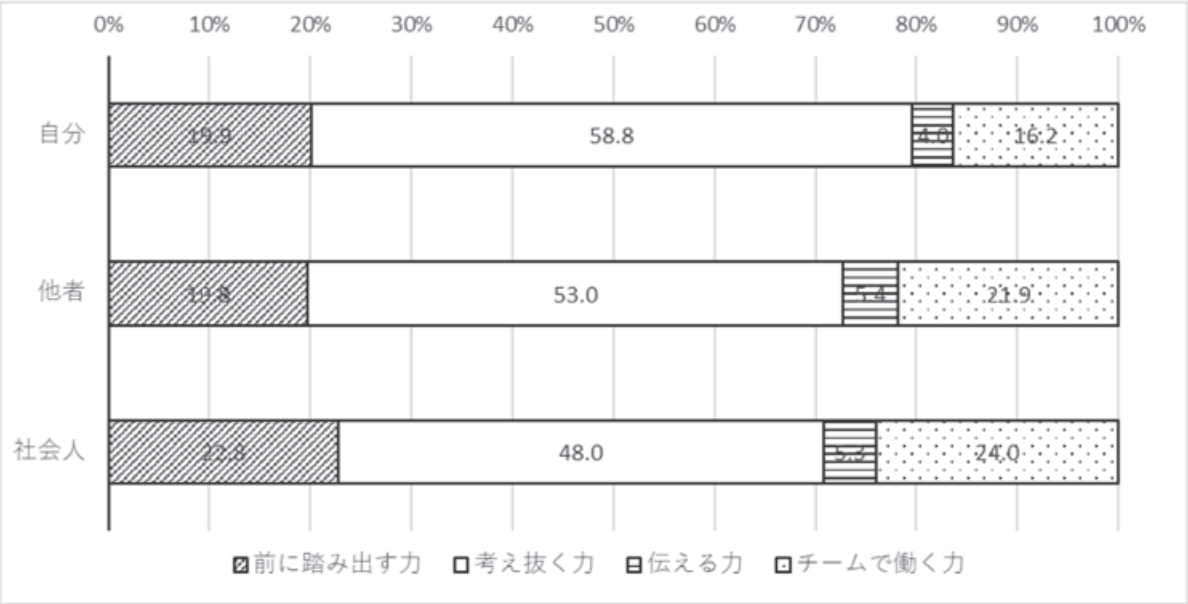

Figure 1：大学生に求められる力、思考力：カテゴリー別の割合

でに社会で活躍してきた経験のある「社会人」は、現在大学生である「自分」よりも、「協調性」や「状況把握力」に加えて、「規律性」や「コミュニケーション力」を重要視していることを示す。例えば、常識を踏まえた行動（母の職場の 50 代女性）や他者との関わり方や周りの環境に応じての対応力（父）という記述があった。

ラベル別の「考え抜く力」

「考え抜く力」について詳細にみよう。「考え抜く力」カテゴリーにおいて、各ラベルをカテゴリー記述数全体に占める百分率で表した割合を Table 2 に示す。

同年代と不明とをあわせて社会人以外として、他者を社会人・社会人以外に区分したものを Figure 2 に示す。

「自分」「社会人」「社会人以外」におけるラベル別の割合について、カイ二乗検定を行った結果、有意な差は得られなかった（χ^2（12）=27.19, *n.s.*）。しかしながら、「自分」と「他者」を比較するにあたって、「考え抜く力」は複数のラベルに分けられるデータであるので、全体を俯瞰して印象的な差異に着目して解釈を試みる。この手法では、その解釈は主観性や恣意性を伴うおそれがありうるが、今後の比較調査のための新たな観点の可能性を提示する仮説生成的なものであるとみなすことにする（大山, 2012）。

Table 2：「考え抜く力」の各ラベルにおける、自分と他者の区分別の記述の割合

ラベル名	自分	他者	社会人	同年代	不明
自分で考える力	24.38	25.99	15.85	38.10	32.08
対比的思考力	2.50	2.26	1.22	2.38	3.77
多角的思考力	10.63	9.04	9.76	9.52	7.55
批判的思考力	6.88	3.39	4.88	0.00	3.77
論理的思考力	5.63	8.47	9.76	11.90	3.77
情報分析力	7.50	6.78	8.54	4.76	5.66
計画力	4.38	1.69	2.44	2.38	0.00
創造力	3.75	4.52	7.32	2.38	1.89
発想力	3.75	1.69	2.44	0.00	1.89
想像力	6.88	10.73	8.54	4.76	18.87
判断力	3.75	8.47	8.54	4.76	11.32
課題発見力	6.25	4.52	7.32	4.76	0.00
問題解決力	13.75	12.43	13.41	14.29	9.43

大学生が考える「大学生に求められる力」

大学生である「自分」が考える、大学生に求められる力のうち「考え抜く力」において、「社会人以外」のそれと比較すると、「批判的思考力」「計画力」「発想力」「課題発見力」の割合が多かった。一方、「自分で考える力」「想像力」「判断力」の割合が少なかった。

大学では高校とは異なり、大学での学びの成果として試験以外にレポート提出が課されることから、問題や課題を見出し、それに関する複数の資料を読み要約し、それを根拠として自分の意見を述べるために「課題発見力」と「批判的思考力」が必要だと考えている

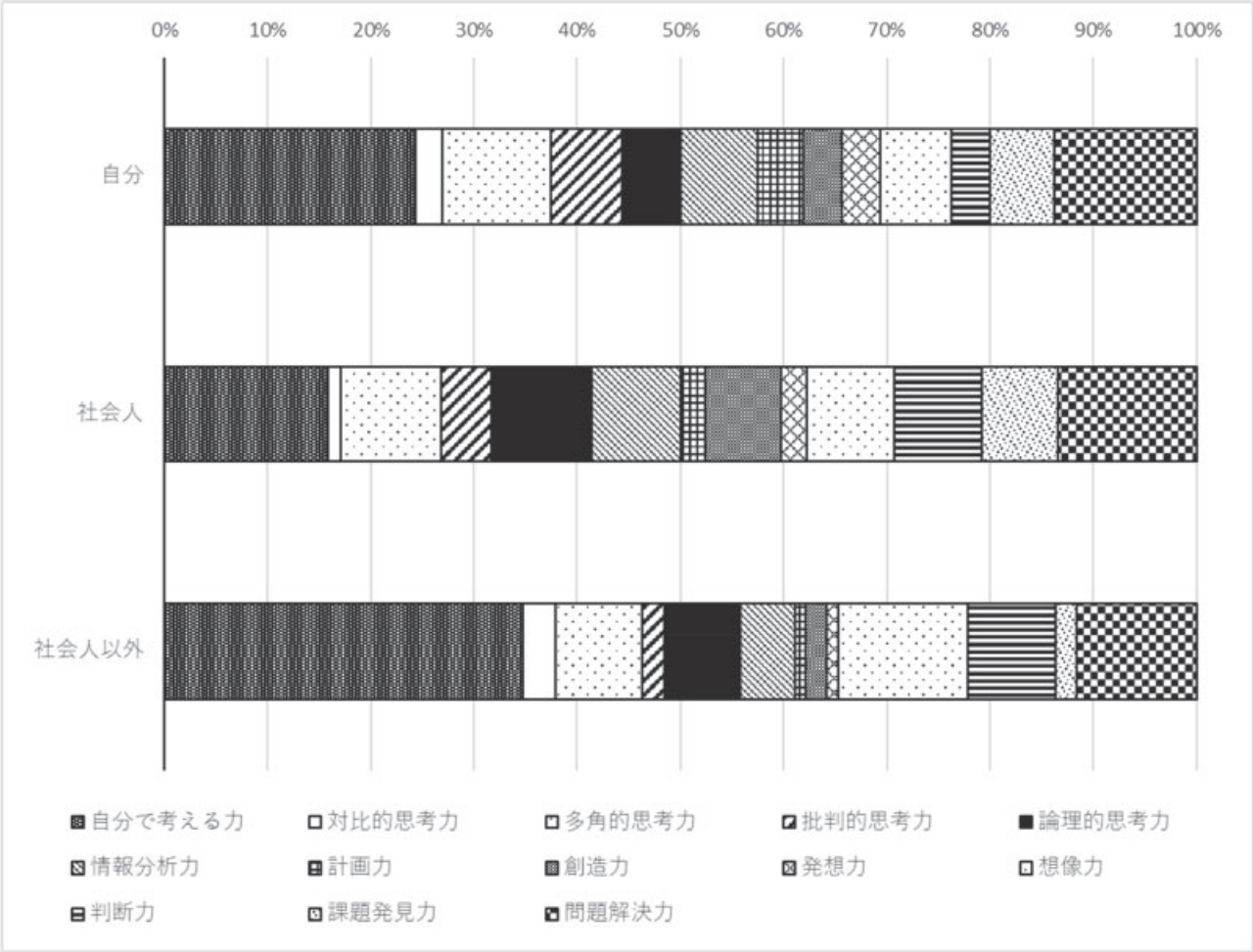

Figure 2：考え抜く力：自分・社会人・社会人以外の、ラベル別の記述の割合

のであろう（「課題発見力」の例：自分で物事の問題点を見つけ出しその問題点について深めていくこと；「批判的思考力」の例：自分の言いたいことの根拠となるものを情報や資料から的確に探し出し正しい情報なのか、根拠となり相手に伝えられるのか考える力）。そして特に 2021 年度はコロナ禍のためオンライン授業が例年になく多く、複数の授業回にわたって課題提出を求められることから、課題を提出期限までにきちんと出させるように前もって考える「計画力」も必要だと考えているのであろう（例：先を見越して期限などに間に合うように、予定を立てること）。そして大学生という立場を意識してなのか、自由なひらめきを必要とも考えているようだ（例：大人には思いつかない、学生ならではの斬新な発想力）。

社会人が考える「大学生に求められる力」

「社会人」が考える、大学生に求められる力のうち「考え抜く力」において、「社会人以外」のそれと比較すると、「創造力」「計画力」「課題発見力」「問題解決力」の割合が多かった。一方「自分で考える力」の割合はかなり少なく半分以下であり、「対比的思考力」「想像力」の割合が相対的に少なかった。

社会人は自分ひとりで考えて行動するよりも、他者と協調しながら行動することの方が多いためか、「自分で考える力」以上に他の「考え抜く力」が大学生に求められると考えているのではないだろうか。特に複数の業務を平行して進める中で先を見越す「計画力」を必要と考えているのであろう（例：物事を優先づける力）。そして課題を発見しその解決方法として「創造力」を必要と考え、大学生にも求められる力としていると考えられる（例：課題を見つけ、解決のためのプロセスを選択し、新しい価値を生み出す能力；疑問に思ったことを追求し、様々な新しいアイデアを生み出す力）。すなわち、特定の力というよりは、問題や課題を見出し、その解決方法を創造し、実行可能な方法を計画し実際に遂行するという、一連のプロセスを

重視しているために、それらを大学生に求められる力とみなしていると解釈される。

Ⅳ　さいごに

本稿では、大学生に求められる力、特に思考力について、大学生と大学生以外ではどのように考えるのか、そしてそれらはどのように異なるのかという視点から検討した。具体的には、大学生に求められる力について、自分の考えを記述し、他者にインタビューを行うことで他者の考えをまとめてもらうという形式で、データを収集し、その結果を分析した。

カテゴリー別の「大学生に求められる力」の分析から、大学生に求められる力として最も割合が高かったのは「考え抜く力」であった。ついで「前に踏み出す力」「チームで働く力」、そして「伝える力」が最も割合が低かった。そして、社会人は大学生よりも、大学生に求められる力として「チームで働く力」を重視していた。

ラベル別の「考え抜く力」の分析から、大学生は「批判的思考力」「計画力」「発想力」「課題発見力」といった記述が多く、レポート作成や課題提出に必要な力を大学生に求められる力としていると解釈された。それに対し社会人は、「自分で考える力」よりも他の考え抜く力に関する記述が多く、「創造力」「計画力」「課題発見力」「問題発見力」のような、問題発見解決に至る一連のプロセスに必要な力を大学生に求められる力としていると解釈された。

本調査対象は「心理学」の受講生であった。この授業では、学習、発達、情動、知能、パーソナリティ、適応、対人関係、社会と文化といった、心理学の諸理論についての概要を把握した上で、それを実践と結びつけながら考え、相互の理解を深めることを目的とした。受講生に日常生活と結びつけながらそして実感を伴いながら考えてもらいたい、授業を通して学問としての心理学に興味・関心を持ってくれたらという授業担当者の願いから、大学生の自己概念（自尊感情、アイデンティティ）や、大学生の人間関係（恋愛や社会との関わり）、大学生の心の健康（ストレス、うつ）を題材に挙げ、大学生としての生き方を自分なりに考えていくことを期待していた。受講生のほとんどが1年生であることから、大学入学後の早い段階で大学生活における目標を持つことで、大学での学びの意欲を引き出すことができれば望ましい。有意義で充実した4年間を送ることができるかどうかは、何を学ぶか、どうやって学ぶか、何のために学ぶか等について心がけているか、すなわち学びの意欲によって異なるからだ。その意味で、「大学生に求められる力」を自分の考えと他者の考えを比較することにより、自分には何が足りないのか、自分には何が求められているのかに気付き、考察する良い契機の一つになったと願う。

本調査は大学生が考える「大学生に求められる力」を検討するために試みとして行った。そのため特定の授業科目の受講生を対象に行われたという点で、調査上のいくつかの制約があった。今後はさらに分析対象を増やし、また分析対象とするデータ数も増やすことで、本論で提示した仮説をさらに精緻化させていきたい。所属学科や学年、性別などの回答者の属性、あるいは数量的データによる指標等を外的変数として考慮した分析をおこなうことで、数量的分析との関連を示すことも望まれる。また受講生自身が自分の考えと他者の考えを比較し、その類似点や相違点についてどのように考えたかの回答結果については本稿で報告ができなかった。受講生自身の後の大学生活の過ごし方にも関わると考えられるので、引き続き今後の検討課題としたい。

Ⅴ　利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

Ⅵ　引用文献

藤田哲也　2002a　京都光華女子大学における導入教育：「大学基礎講座」　京都大学高等教育研究　第8号　131-147

藤田哲也　2002b　大学基礎講座の授業運営に関する検討　京都光華女子大学研究紀要　第40号　39-64

伊藤美加　2004　大学基礎講座の授業運営に関する検討II　京都光華女子大学研究紀要　第42号　75-92

伊藤美加　2005　大学基礎講座の授業運営に関する検討III　京都光華女子大学研究紀要　第43号　67-83

伊藤美加　2006　きちんと考える方法：自分の意見を言うために　藤田哲也（編）『大学基礎講座 ―充実した大学生活をおくるために―　改増版』北大路書房　pp.97-114

伊藤美加　2007　大学基礎講座の授業運営に関する検討 IV　京都光華女子大学研究紀要　第 45 号　107-125

伊藤美加　2012 「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」の授業運営に関する検討　京都光華女子大学研究紀要　第 50 号　67-80

伊藤美加　2013 「コミュニケーション演習Ⅰ」における学習効果の検証、京都光華女子大学研究紀要 第 51 号　51-59

経済産業省　2006　社会人基礎力に関する研究 「中間とりまとめ」概要

三宅なほみ・白水始　2003　学びを見直す　三宅なほみ・白水始 『学習科学とテクノロジ』 放送大学教育振興会　pp.13-25

西道 実　2011　社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み　プール学院大学研究紀要 第 51 号 217-228

大山泰宏　2012　何が人を幸福にし何が人を不幸にするか――国際比較調査の自由記述分析――　心理学評論　55 巻　90-106

注

本研究は、京都光華女子大学研究倫理委員会（承認番号 120）の承認を受けて実施した。

本研究は科研費（基盤研究（C）21K02870）の助成を受けたものである。

本研究は、受講生には調査協力の依頼として、研究課題・調査内容・プライバシーへの配慮・調査に参加しない自由の確保については後に文書で示したが、レポートをもとに分析を行い、論文化することの許可を得ていたわけではなかった。授業内で得たデータは教育のために用いるとしても、研究利用する上では別途同意を得る必要がある点や強制がかからないよう配慮が十分でなかった点がある。これらはひとえに筆者の倫理的問題についての認識不足であり、指摘いただいた査読者には感謝申し上げる。